

---

# 交換ノート

忍野佐輔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交換ノート

### 【Nコード】

N5502V

### 【作者名】

忍野佐輔

### 【あらすじ】

奈々子は交換ノートを抱えて、ある場所へと向かう。  
彼女はどこへ向かっているのか……？

習作の掌編です。

所属サークルHPでも掲載しております。

電子書籍発信サークル【結晶文庫】

『では、水曜日に』

「はい。よろしく願います」

奈々子は携帯電話を切り、心を落ち着かせる為に小さく深呼吸した。

目を閉じる。今、自分に起こっていることを、改めて確認する。そうして再び目を開くと、ちょうど停留所にバスがやってくる所だった。ドアが開き、幾人かの乗客が吐き出される。それと入れ替わるように、奈々子はバスへと乗り込んだ。

平日の昼間だからだろうか。奈々子が乗った車両には、乗客が二人ほどもしか見当たらない。

ちよと良かった。少し座ってゆつくりしたかったのだ。

奈々子は真っ直ぐに一番奥の席へと向かい、窓際へ腰を下ろした。バスが動きだし、心地よい揺れを奈々子に与える。車窓からの風景は、普段奈々子が生活する都内よりどこか寂れた印象があった。珍しいような、懐かしいような。そんな不思議な感覚に身を委ねて、奈々子はぼーっと車窓の外を流れる風景を眺めていた。

「ありゃ？ 奈々子じゃん！」

甲高い声。

誰かと思い、奈々子が声の方向へ視線を向けると、懐かしい顔があった。

「……麻耶」

「なーに、その顔。もしかしてあたしの事、忘れてた？」

いたずらっぽく笑いながら、麻耶は奈々子の隣へと腰を下ろす。

「おひさー、奈々子。元気してた？」

「うん、元気にはしてたよ」

「あはは！ “は”ってなによ、“は”って！ …… あ、もしかしてアレを忘れてたとか？」

「ううん、そんなことないよ。ちゃんと書いてる」

「ほんとにいいー？ じゃあ見せて」

そう言うなり、麻耶は奈々子が抱えていた鞆へと手をつ突っ込んで、無理矢理一冊の大学ノートを取り出した。表紙には大きく『交換ノート、その12』の文字。

麻耶は交換ノートをパラパラとページをめくる。

「なんだ、書いてんじゃん」

「…… だから書いてるって言ったじゃない」

「奈々子は口だけだからさあー」

麻耶にだけは言われたくない。奈々子はそう言いかけたが、呑み込んで

だ。十年以上の付き合いで、麻耶とは口喧嘩で勝てないことを奈々子は知っていた。

「うん！ これならもう、大丈夫そうだね」

「大丈夫って何が？」

「これだけ続けられたなら、これから先も書き続けられるでしょ？」

麻耶はそう言って、ノートの中身を奈々子に見せるようにしてページをパラパラとめくる。

内容は、必ず見開き二ページで区切られていた。左側には三行程で書かれたお題と、右側にはお題を受けて書かれた小説。それがノートの最後まで延々と書き連ねられていた。

それは、奈々子と麻耶の友情の証だった。

お題を麻耶が出し、奈々子がそれに合った小説を書く。そしてそれを読んだ麻耶が、感想と共に新しいお題を出す。まだ二人が中学生だった頃。小説家を志していた奈々子に『小説の修行になるから！』と麻耶は無理矢理、この交換ノートを始めさせたのだ。

「それじゃ！ あたしはそろそろ行くから」

麻耶は交換ノートを奈々子に返し、席から立ち上がる。

「……？ 次のノートは？ お題は？」

「そんなのないよ」

「そんなのないって……。麻耶、それってどういう」

「んじゃ、奈々子！ またねーん」

ガタン、とバスが大きく揺れ、奈々子は目を覚ました。

周囲を見回しても、誰もいない。いつの間にか、乗客は奈々子一人になっていた。

バスのアナウンスが次で終点だと告げ、ほどなくしてバスは停車した。奈々子はバスを降り、そのまま『たちはな霊園』と書かれた敷地へと入っていく。

そうして奈々子は、麻耶が眠る墓の前までやってきた。

「最後のノートだよ」

奈々子は墓石の前にしゃがみ込み、鞆から『交換ノート、その40』と書かれた大学ノートを取り出した。

墓石の前に置いたノートを見て、麻耶が死ぬ前に言ったことを思い出す。

『いい、奈々子？ あたしはこれから死ぬけど、だからってあんたは小説を書くのをやめちゃだめ！ でも奈々子のことだから、あたしが見てなかったらめんどくさがって、小説書かなくなっちゃうと思うの。だから、これを渡します』

そう言っただけで麻耶が奈々子に渡したのは、お題だけが書かれた交換ノートだった。

麻耶は『こんだけお題考えるの大変だったんだから、奈々子はちゃんとあたしを楽しませなさい！』と笑って、そして、この世を去った。

「お題考えるより、小説書く方がよっぽど大変なのよ」

奈々子は墓石に向かって苦笑する。お題だけが書かれたノートを何十冊も渡してきた時には、何を考えているんだと思った。死ぬ間

際に何をしているんだと。

でも、そのお陰でこの三年間、麻耶がずっと側にいてくれたような感覚があった。

「麻耶。私、新人賞を受賞したんだ。水曜日に編集者さんと会った。何ヶ月かしたら、私の本が本屋に並ぶんだって。……麻耶が、交換ノートを続けてくれたお陰、かな」

お題を書いておいてくれた、とは言わない。

きっと麻耶は本当に、ずっと私の側にいて、私の小説を読んでいてくれたはずだから。

【完】

（後書き）

サクッと楽しめるものを目指して書きました。

少し長くなってしまいましたが楽しんで頂けましたでしょうか？

もし楽しんで頂けたのなら、意見や感想などを頂けると助かります。

所属サークルHPでも掲載中

電子書籍発信サークル【結晶文庫】

<http://kessho-bunko.style.coocan.jp/index.html>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5502v/>

---

交換ノート

2011年10月9日11時16分発行